

八木健に学ぶ滑稽俳句 15

高橋 素子

うなぎ焼くにはほひの風の長廊下 きくちつねこ

うなぎ焼く栄養の音滴らせ 八木健

うなぎ食ひつかみどころのない話 八木健

猛烈に暑い。うだる日本列島。〈土用の鰻〉と言われるように、この時期に体力をつけるには鰻にかぎる。掲出のきくちつねこの句は、鰻の形を想像させる長廊下を、吹き抜ける風に乗って、鰻を焼く香ばしい香りが・・・想像するだけでもたまらない。季語「うなぎ」の特徴をよく表している名句と、言わざるを得ない。

師・八木健の句は、滴る鰻の油が、火に落ちてたてるジュウという音こそ、栄養の音なのだと、詠んでいる。確かに、季語の本質を突いた滑稽句の佳句だと思う。

次の師の句も季語の特徴をよく捉えている。「鰻は親指・人差し指・中指の三本で掴む事出来るが、掴みどころのない話の方は、どうもね」と、師は笑われた。

ところで、鰻は赤道付近の深海で産卵され、何千キロの旅をして河川を遡上する頃にシラスウナギと呼ばれる稚魚になる。この稚魚の採捕量が激変。去年二月、環境省はこの二ホンウナギを絶滅危惧種に指定した。とこ

ろが、今年はこのシラスウナギが昨年の倍捕れたとのニュースが流れ、安価に鰻をお腹いっぱい食べれると思ったが・・・期待は見事に外れたらしい。鰻好きには、悲しい話である。

そこで、私も一句詠んでみる。

お隣の鰻の匂ひに箸すすむ 素子

今回も古来の名句と師・八木健の句を比較して滑稽句の学習を深めたい。

仏壇に尻を向けたる団扇かな 夏目漱石

叩かれてばかりのうなぎ焼く団扇 八木健

漱石の句は、さっきまで仏壇に手を合わせていた客が、やおら仏壇に背を向け、尻を向け、かたわらにあった団扇でばたばた扇いでいる。「尻を向けたる」という面白い表現で、客の性格が一瞬にして分かる見事な滑稽句となっている。

師・八木健は、店先で鰻屋の団扇が叩かれてばかりいることを発見して、団扇を擬人化、滑稽句の佳句となった。鰻の匂いを店先に扇ぎ出して客を誘い、威勢よく叩かれるその音で商売繁盛を演出する団扇の身は、役目とは言え、可笑しくも哀しい。

火だるまの秋刀魚を妻が食はせけり 秋元不死男

秋刀魚の解剖お箸のメス揮ひ

八木健

「あはれ 秋風よ 情(こころ)あらば伝えてよ 男ありて 夕餉に ひとり さんまを食らいて 思ひにふける と 」に始まる詩は、佐藤春夫の有名な「秋刀魚の歌」(1922年所収)であるが、この哀調の詩は、秋刀魚に詩的情趣を与えて来た。

秋刀魚はプロが焼いても、うまく焼けなくても、美味しい魚だ。火だるまの秋刀魚もこれまた良し。掲出の不死男の句は、妻の秋刀魚の焼き方の下手さを嘆いているかに詠みながら、その実、妻に投げかける温かい眼差しが感じ取れる。

掲出の師匠の句に、「解剖・・秋刀魚の身を崩して食べているだけなのに、まるで理科の実験の様な不思議な気分になさしてくれますね」と、勝手な解釈をしていたら、「ちがう、ちがう。理科の実験なんてなまやさしいものじゃなくて、遺体の解剖です。滑稽な俳句作りには、『俳句らしい言葉』を使わないことが肝心なのです。秋刀魚を食べるのに、品がないけど、あれは確かに『解剖』なんです。写生をするのに適切な言葉をさがして見付けたのが『解剖』です。すると、自ずから『箸』ではなく、『メス』となりますね。」と、師匠。「俳句における滑稽は、先入観を払拭して、対象と向かい合うことで生まれて来ますよ」と、続けて教授された。

嫁して食う目刺の骨を残しつつ

皆吉爽雨

穴だけの眼に睨まれて目刺食ふ

八木健

皆吉爽雨は、家族同居の家に嫁いで来た新妻が、お膳の目刺を悪戦苦闘しながら食べる様子を、鋭く意地悪とも見える目で句に詠んでいる。目刺は庶民の味、頭から丸ごとバリバリ食べるのが普通だが・・・新妻にとって、それは、はしたなく恥ずかしい事。困った新妻は、注目の家族のなか、骨を残しながら少しずつ端から嚙んで食べたと言う。今の若い人たちには笑い話かもしれないが、昔のお嫁さんは、本当に大変だった。

「俳句は非科学的でよいのです。どこか哀しみがある・・・それが滑稽詩です」と、師匠には教えられている。掲出の師・八木健は、心に受けた印象を上手く句に詠んでいる。科学的には、死んでいる魚が睨む事などありえないのに、確かに恨めし気に穴だけの眼に睨まれている様な気がして来る。「空洞はまさに恨みの眼です。目刺を食べる時に、髑髏に睨まれている様な感じがします。金子みすずの世界ですね。鰯が人間になにかしましたか・・・ということなのです」とは、師匠ご自身の感想である。